49　オットー　モーニッケの博物学研究

相川忠臣

オットー　モーニッケOtto G. J. Mohnikeは牛痘をもたらした出島の商館医である。一八四九年の牛痘植継ぎ成功については楢林宗建の『牛痘小考』に詳しい。宗建の『磨尼缺對談録』巻之一には一八四八年の牛痘苗は三つの方法でもたらされたがどれも惜しむべき結果になった事と多くのモーニッケの治療例が示されている。薬物についての巻之二には、一八四七年に始まったコロロフヲルム（クロロホルム）の吸入により手術時に麻痺させ無痛とする方法を紹介している。麻酔という言葉はまだ使用していない。宗建の二書から彼が経験豊かな優れた臨床医であり、最新の医学を伝授していたことがうかがえる。

しかし出島に赴任したばかりのモーニッケがシーボルトに書いた手紙を読むと、彼はケンペル、ツュンベリー、シーボルトと続く輝かしい商館医の博物学探求の伝統を担うつもりで来日したことがわかる。手紙の中で、総督の命により自然科学調査官兼商館医に任ぜられた事、あなたの偉大な仕事の跡残された物は少ないが落穂拾いをする為に微力を尽す事、東インドに赴任以来博物学特に動物学の研究を続けてきた事を述べ、最後に出島の植物園について長く放置され科学的価値は失われたけれどもあなたが育てた植物が毎年緑豊かに育ち、咲いていますと書いている。シーボルトはこの手紙の最後を読んで、出島に建立したケンペル、ツュンベリー顕彰碑の銘文を想起したに違いない。

モーニッケはグライフスバルト、ボン、ブレスロー、ベルリンの各大学で学び、ベルリンでの学位論文は動物の性本能と人間のそれとを比較したものであった。オランダ東インド陸軍軍医としてジャワに赴任した一八四四年以降、ジャワ、スマトラのパレンバング、出島、ボルネオのサンバス、アンボイナの各地で博物学の調査を行った。一八六九年軍を退官しボンに帰ってから、膨大な結果を纏めて『Die Japaner』日本人、『Affe und

Urmensch』猿と原人、『Blicke auf das Pflanzen und Thierleben in den Niederlaendische Malaienlaendern』オランダ領マレー諸島の植物と動物等の優れた博物学の著作を出版している。一生たゆまなく博物学の研究に没頭し、一八八七年永眠した。

進化論で有名なA.R. Wallaceはその著『マレー諸島』の中でモルッカ諸島のアンボイナにいたモーニッケを訪ねた時の事を記述していて、彼の人柄の良さと甲虫や日本のオサムシ等の彼のコレクションの素晴らしさにふれている。甲虫の図鑑に出てくるオオサイカブトムシ（Oryctes gnu mohnike）やモーニッケイノコギリクワガタ（Prosopocoilus mohnikei mohnikei）は彼によって学名が付けられた。二十二のハナムグリの新種をスンダ島とモルッカで見つけている。彼が日本で見出した新種のタツノオトシゴには魚類の大家P. Bleekerにより Hippocampus Mohnikei Blkr. と名付けられた。家にまわりに霊長類、鳥、その他の動物を飼い生活を共にして、その生態を詳しく調べ類人猿や動物の書を著述した。日本人を人類学的に調査して『Die Japaner』を著し、日本の最下層身分についてまで調べた論文がある。

モーニッケはシーボルトが失敗した牛痘普及を成功させただけではなく、シーボルトと同様に博物学で業績を残した素晴らしい国際医療人であった。

（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・医学部生理学第一）